

# ヴェイジョンを語ろう

緒 方 純 雄

一

同志社が田辺に土地を購入してから、長い年月が経過した。田辺校地での教育実施計画も立てられ、ようやく来年四月から田辺で教育が始められようとしている。校地購入から今の段階まで、さまざまなことがあった。とうてい実現は無理だと思わざるをえないことも、再三あった。こんなことを想起し、よくぞ実現できるようになったものだと感無量である。今は故人となった人人を含めて、実現に向けて努力を重ねてきた人人の労を偲ばざるを得ない。

しかし、本来ならば、困難辛苦のあげくの大きな企画の実現を前にしているのだから、興奮とか希望、あるいは熱意といったものが学内に盛り上がっているのが当然だが、そんなものは一向に感ぜられない。学内で互いに出会っても、ああもしたい、こうもしたいと

いったように話が弾まない。学内の教職員の心が弾まないということ、これは問題である。心弾まないで田辺校地での教育が弾むはずがない。田辺校地について私なりに意見がある。しかし、それについて書くより、こんな問題を取上げて考えるのが先決だという気がする。

どうしてこんなことになったのだろうか。確かに、校地を求めて苦勞した先輩たちには熱意があったし、夢もあったにちがいない。熱意も単に校地を拡げるといっただけでなく、新しい校地を得て、そこに達成を期待したものから生まれたものであった。しかし、戦後の大学が経てきたさまざまな試練、困難、さらには大学紛争の時代では、そんなものを表明し、論ずることはむずかしいことであった。勇気をもって、それを敢て試みたとしても、学内でコンセンサスを実際に得ることは、望むべくもなかった。多様のためにコンセ

ンサスを得るようなことではなく、これについては不毛であった。大半が黙して論議を避けてきたというのが実相であろう。総長、学長とか、大学機関にしても動きようがなかった。コンセンサスづくりなど、おおよそ不可能であったし、徒勞に終わることであった。多数のものは、いわゆる校地、中心校地といった実際に緊急な問題に焦点をきめて、極めて実務的に、非情情的に田辺校地を見てきた。今も事情はあまり変わっていない。これはおかしいというのが、私の立場である。

しかし、当然これには異論もでてくるだろう。すなわち、新校地への移転は本来校地問題、増加してきた学生数に見合う規格の校地の問題に帰するものであるから、これについて他に、夢とか期待などをあげつらうような事柄ではない。非情情的に対応し、空間とその有効な利用という実務に問題は帰するという論法である。確かにこれは明白なことであり、容易にコンセンサスとなりうる。これに対しては次に云いたい。第一に同志社に立学の精神が生きており、あげつらわなくても、それが同志社のバックボーンとなっておれば、こんな発言はさほど気にする必要はない。しかし、心配になるほど立学の精神がうすれ、気概もなくなり、同志社がだんだんと同志社らしくなくなっている動きの中で、こんな発言が田辺校地を蔽い、定着するようにでもなれば、今後は一体どうなるだろうか。今出川校地では、まだ同志社の歴史や伝統を想起させる有形のものが存在している。新しい校地ではそうしたものは無い。無形のもの、たとえば、スピリットがあって、それが形をとるというようなことを望みたいが、それはむずかしいだろう。大学のチャペル

にして、大学評議会で決議されながら、具体化の見通しもついている現状である。脱同志社の流れが田辺で始まることになる。第二に、新しい校地が今までの校地の単なる移しかえになってしまつて、新しい構想が立てられないとすれば、これは奇妙なことではあるまいか。あれだけの経費を投じ、学生の半数、多数の教職員が移動し、“一世帯”が二分することにヴィジョンがないなどは、おおよそ無責任ではないだろうか。例えば、具体的には、新しい学科、学際的な研究・教育、あるいは、新しい学部ができてよいではないか。六学部体制が当り前かのように続けられてよいかどうかの論も出てよいではないか。当今、他の大学が国際的なプログラムをやたらとひけらかせているなかで、同志社ではそのようなことは今に始まったことではない。しかし、これについても非常に消極的である。国際交流、留学生の受入れなど、同志社らしくこれを実現できるのではなからうか。ハイテクニクの時代、それらを取入れ、工夫した教育設備を進めるとか、もっと進取的であつてよいではないか。もっと大学の教育研究の構想が弾んでほしいものである。今は開校に向けて、さしあたり施設、機構制度が何よりも急を要するものであろう。しかし、それと並んで、あるいは、それを上まわつてヴィジョンなどについて話が弾んでほしいものである。機構上委員会があつても、一般に話が弾んでいないところでは、委員会が機能するとは思わない。最近、委員長の名を冠して委員会が呼称されているが、ますます委員会が一般から浮いている印象を受ける。

第三に、新しい校地は別としても、今日、大学は、いかにありうるか、という課題をかかえている。戦前少数にすぎなかった大

学が、戦後急激に増加し、今になって大学はその質、方向、理念について、いかにありうるか”という課題を負っている。九十年代に入ると、進学人口が急減し、これに伴って米国と似て、合併・倒産を余儀なくする大学も出てくるだろう。また、日本経済の高度成長もやがて発展途上国に追い上げられ、企業の大学卒業生需要も今のままで進むとは考えられない。ここでは、いかにありうるか”はまさしく存亡の問題でもある。東南アジアを含めて外国の大学生活に多少でも触れたことのあるものにとっては、今の日本の大学生活、学生は奇異に見える。客観状況の前ではひどく抵抗力を欠いているという危惧を覚える。今までのようではどうい存在し続けることがむずかしいと思われる。さらには大学間の格差が意識され、競争がはげしくなり、こうしたことから、いかにありうるか”と問いかけてられている。大学はいかにありうるか。私は大学は常に新しいものを追求してやまないものであり、同時に古いものを大事にして行くものであり、二者は表裏一体をなすと考える。古くして変わらないものの中に、要となっているものは、知の追求のうちに培われる主体としての人格形成である。これを欠く大学はいくら学生数が大であり、能力ある学生を集めることができたとしても、没人格主体の人を送り出すとすれば、それは大学存在の意義を喪失したものと云うことができよう。政治に経済に気味が悪いほど没人格主体を私たちは周囲に見ている。同志社にして、もしこれが見失われるならば、同志社は同志社でなくなり、新島先生とは無縁のものになってしまう。今日多くの大学がそのレゾン デートルを求めて、いかにありうるか”と探索しているなかで、よくよく心して見れば、

同志社ももっとも根源的なもの、人格主体についての教育伝統を受けついできている。実務上に急を要する問題だけにかかわり、この伝統に生きて行く気概を失うならば、危機的である。だから、私はこうしたことについて学内で論が弾んでほしい。少なくとも話が弾んでほしいと願っている。

## 二

さて、実務的なことはともかくとして、田辺校地について、ひいてはこれを契機として同志社の教育について、もっとヴィジョンの論議が盛り上ってほしいが、どんな方法があるだろうか。ヴィジョンと云えば、一般にはそれは現実に対して高遠なものであり、ややもすれば抽象的なものと見なされている。しかし、ここでは私はこれをプラグマチックなヴィジョンとでも名づけることができるものと定義しておく。田辺で具体的に進められるもののうちにおいて、少なくともそれを現実に向つて、目標づけ、同時に現実を整えて行くというような、地に着いたものと解したい。現実をかけはなれて高遠なものではない。見通しがなく、不安であり、困難、限界あり、整備されておらず、探索すること多い教育実施の現実のなかにおいて、ヴィジョン作りは、今までヴィジョンなど念頭におかないで済んできた現場とはちがって、むしろ、なしでは済まされない、必須のものとなってくるだろう。現実に対してこれみよがしの高言で済ませることができなくなる。だから、私は現実にかかわらせてヴィジョンを論ずることはさほどむずかしいことでも、抽象的なことでもなく、また肩を張って建て前を論ずるようなことではなくなる

と考える。田辺の問題がこうしてひるがえって同志社のレゾネートルの問題にもなればと、私は非常に期待している。

だから、四月からというのではなく、今からでも四月以降に向けて論議が盛り上ってほしい。そして四月からは実際に現実の諸問題——予測も及ばなかった困難、眼界、その中から探索される方向、目標、根底——への自覚が深まるはずであるから、その自覚体験のうちより互いに話しあい、論じあうことが始まってほしい。しかし、折角こうした機運ができたとしても、それが直ちに委員会組織に移ることに、私は余り気乗りがしない。委員会でまとめるようなことは後でよい。とにかく原案とか、素案などが出されて論議が始まるというようなことは、巨大な機構制度で止むを得ない場合を除いて、よいとは考えない。これは、率直に云えば、官僚的な方策である。この場合でも、一応公聴会などが工夫されているのである。とにかく、一般多数のものが、論議に弾むような場があつて然るべきである。これが直ちに委員会という機構に移ると、当初の多分にみずみずしい感性的な、直観的なものが磨滅しがちである。委員会重視は一般のものの氣勢をそぐ。また委員会での論議がおざなりに報告されると、ますます氣勢をそがれることになる。委員会はえてして一般多数者を代弁、代表すると簡単に自負しがちであるが、実際には多数者は埒外に置かれる結果となる。制度化が整って行けば、一般参加は一見保障されているようでありながら、実は減少している。近代的、能率的、機能的に大学運営が行われる必要はいうまでもない。しかし、大学にして、委員会制度、機構制度、リベラルなものであれ、上意下達らしい線が定立すると、自由に考え、表

明し、活発に論議を交わすことが少なくなり、「ブルータスお前もか」と云いたくなる。それは大学の末期症状でもあろう。日本ではよほど心しておかないと、この傾向は自然本来的に、あるいは業みたくないものとして、われわれを把えるであろう。同志社に長年いて、同志社が様変わりしているように感知するから、私は敢てこのことを述べておきたい。巨大な投資をして大きなヴェンチャーを試みているなかで、ヴィジョンに論議を盛り上げよう。これが私が書きたかったことである。

終りに大学、女子大、女子短大、国際高校が田辺で相接することになる。同志の連帯が具体化できないだろうか。これについても私たちは本気で考えたいものである。

(大学神学部教授)



# 田辺校地開学に向けて

坂 口 一 彦

大学の発展に不可欠なもの一つとして、設置地域の環境があげられる。大学にとって一部あるいは全面移転は、その大学の命運を左右する大事業であることは論をまたない。本学も移転の決意を公にして以来、早二十年が経過した。また具体的計画が公表され約十年、その間各機関、各組織において、いろいろ審議、検討が加えられ、周知の通り来春一部移転、田辺校地の開学を迎えることとなった。

我国の高等教育は、いま曲がり角を迎えている。高学歴志向に改革がみえつつある現在、社会の動向に目を向け大学の改革を進めてゆかねばならない。国が首頭をとって学歴社会の変革を推進しようとも、従来からの高学歴志向は内容の変わった形で存続し、より一層強まっていくことであろう。

数年後に十八歳人口の急増期、その後に減少期を迎え、また来春予定されている臨教審の答申に向けて、高等教育機関はそれぞれの進む道、また方向を自から選択決定し将来の指針を見出し出してゆかねばならない時期に到来している。このような高等教育の激動期に

移転の時期が一致したことは、大学にとって改革の大舵を振るうにも良い機会であるかもしれない。ここでは田辺校地開学にあたり、次代に向けての同志社について、一教員の視点で記述してみたい。

## 現状から見た田辺校地

田辺校地移転の実現をみるまでには、周知の通り紆余曲折を経ている。田辺校地移転は、今出川、新町校地の狭隘さから生じる諸問題の解決、新しい時代に対応できる教育・研究条件の整備充実のための移転として多年に渡り検討が加えられてきた。校地の狭隘さから生じる教育・研究環境に及ぼす影響は、多年同志社の発展を阻害し、社会的要請の受け入れを拒んできた。特に大学設置基準による中心校地問題から現校地での拡充発展は不可能であった。また設備の充実も校地の狭隘さから限界に達した感がある。したがって校地の狭隘さの解消によって一層の拡充発展が期待できる。

同志社大学は、二十数年前新町校地の取得以来、京都市内での校地の拡張はほとんど見られなかった。しかし図書館、光塩館、徳照

館と施設は充実され、工学部の諸設備は他大学に決して優るとも劣らない充実をみた。同志社二世紀へ向けての充実発展の夢を開くためには、田辺校地の有機的活用こそ強く望まれる。

いま、田辺校地はこの世に生を受けたばかりの校地である。新しい校地で教育・研究条件を整備充実させ、今出川、新町校地以上の優れた教育環境に育てはぐくんできてゆくためには、相当の覚悟と当分の間多少の犠牲を払わなければならない。しかし同志社創立時の新島襄先生の苦労と比較すれば、その苦労は微微たるものではなからうか。今後の思索いかんによっては犠牲は最小限に止めることも決して不可能ではない。またその方向での努力をなすべきである。そのためにはひとりひとりの関心の高まりが不可欠であろう。

#### 移転を終えた他大学の場合

同志社と同規模の幾つかの大学が既に成功裡に移転を終えている。それらの大学の移転に向けて、あるいは移転後の問題点などについて大学時報（三十四巻、一八一）を参考としてまとめてみよう。

青山学院大学 移転の動機としては、国際政治経済学部の新設と大学設置基準による中心校地不足からである。一、二年生の厚木への移転により、渋谷、世田谷、厚木の三拠点になっている。土地購入より移転まで比較的短期間（約二年）である。当初複数学部の移転を計画したようであるが、学内のコンセンサスが得られず、結局文系学部一、二年生、理系学部一年生の移転となったようである。移転後の問題として、研究室の問題、学生の生活の問題など生じているが、現在これらの問題は解決され、全体として施設にゆとりが

でき、厚木は教育環境がよく学生の出席率がよくなっているのととである。

#### 中央大学

中央大学は年々規模の拡大によって、研究・教育条件の低下がみられ、神田校地でのこれ以上の発展が不可能との結論に達し、研究・教育条件の改善ということを中心として移転に踏み切り多摩への文科系全学部移転を実行した。理工学部の移転は、経費が膨大になることから現在地で充実を計ることとしている。したがって拠点は二箇所となっている。典型的な都市型から郊外型への移転で、機能的には現在円滑に動いているようである。まだいろいろと問題があるが、一応移転は大成功だったとの結論に達している。移転によって教室の使用効率が五〇〜六〇%ぐらいに下り（従来一〇〇%）、教室が多目的に利用できず教育などに成果が上っている。現在郊外というイメージが受験生に与えた影響が若干であり、受験生の偏差値の低下がみられる。質の低下の防止対策としては、今後、教職員の努力、教育・研究活動の充実に励むことによって克服できるものと期待されている。

#### 法政大学

法政大学は部分移転で、経済学部、社会学部の二学部を多摩校地に移転させ、市ヶ谷に三学部、小金井に工学部の一学部、三拠点となっている。移転の動機は、大学設置基準上の問題から市ヶ谷でのこれ以上の改革はのぞめず、大学全体の改革が進められないといった理由による。全学的同意の困難さが、当初予定した移転の方向を大幅に変更し部分移転となったようである。また新設学部の問題も難航し現在検討中である。多摩校地では学生の施設の問題など今後解決しなければならない多くの問題をかかえている。

関西では、すでに二拠点から一拠点に統合した立命館がある。また関西学院大学も一部移転の計画が報道されている。

移転を実施、また計画中の各大学に共通した問題として、現有校地の教育・研究条件整備充実の限界、社会的要請への対応等々を勘案した場合、大学の改革は校地の狭隘さから生ずる問題によって拒まれていく。

#### 田辺校地開学までに

田辺校地開学まで後半年、大学として解決しておかなければならない多くの問題を抱えている。組織の問題、設備の問題、学生の生活の問題、地域社会の問題など多くの事柄が上げられよう。特に将来に向け同志社として猶予を許されない大きな問題がある。それは社会の要請に答えるための大学の改革である。単に校地の狭隘さの解消のみを図った移転ではなく前述のように、教育・研究条件の整備充実が移転の大前提であった。これから半年あらゆる機関、組織において田辺開学のための話をやらねばならない。今出川、新町校地では実現できなかった教育・研究を田辺校地で具現化し、多年抱えていた夢の実現に向かう必要がある。

上記諸問題については、学内諸機関で充分検討が加えられることを期待する。その他移転によって生ずる問題、例えば、二年から三年への進級、再修の問題など学生の生活問題も含めて起り得る事を充分予測し対処しなければならない。

基本的には、田辺校地で特別の教育を実施すると言ったものではないが、今出川、新町校地を含めた全学的見地での教育・研究条件

の整備充実に関する検討が早急を要する。やがて迎えるであろう学生の急増・減少期に対応する教育、高学歴志向の変革を思考した上での整備充実でなければならない。

#### これからの同志社

田辺校地の利用により校地の狭隘さは解消されたこととなる。教育・研究条件を整備充実させ田辺校地への移転が同志社の歴史において大成功を収めるべく同志社人ひとりひとりの奮起が要求されることは論をまたない。現、今出川、新町校地ではかなえられなかった充実発展のいろいろな夢の実現へ向けて邁進しなければならぬ。過去、充実発展のために英知を集めいろいろな審議検討が加えられ、数多くの委員会報告などが存在する。それらに費した努力、時間は膨大なものがあり、それらの有効利用を含めた上での審議検討が必要ではなからうか。

いま、同志社は田辺校地一部移転による大きな変革期を迎えている。そこで一歩踏み込んだ改革の時でもあろう。外では二十一世紀に向けて高等教育の改革が推し進められている。まず社会的な要請に対応しなければならぬ教育機関である大学、特に私立大学は先人達の培った伝統を育みながら発展の道を歩まなければならぬ。

整備充実の検討の中から学部、学科の改編、統合、新設といったものが上ってくるかもしれない。関西の諸大学を眺めた時、関西学院大学、関西大学、立命館大学とそれぞれ新設学部、新設学科が社会的要請に答える形で設置されてきた。立命館大学では近年中に国

際関係学部、情報処理学科などの新設が報じられている。本学も従来は中心校地不足といった理由などから社会的要請に答えるための拡充発展は阻害されていた。しかし田辺校地開学によって、大学設置基準の中心校地問題は完全に解消されたわけである。

筆者には、社会、人文系学部に関する知識は貧弱で、意見を述べる資格はないが、理系については、若干の考えを持っている。ここで具体的に記述することはさしひかえるが、工学部の現状に決して満足している訳ではない。昨今、全国の大学において、理系学部の充実発展はめざましいものがある。国立大学のみならず私立大学においても、現代社会の要請に対処すべく充実発展をみているのが現実である。

同志社も田辺校地での開学が軌道に乗った今、将来を展望した上で、何らかの改革を大いに望むものである。ただし大学の教育理念、キリスト教主義教育に立脚した上での展望でなければならぬ。幸いなことには本学には新島先生の設立の旨意が脈々と現代に生きている。

### おわりに

本学の教育理念として上げられるキリスト教主義に基づく教育を具現化するための対策を真剣に検討しなければならぬ時代ではなからうか。進むべき道、選択を誤まるならば、世論に逆行し大学の発展を阻害する恐れがある。同志社の将来の展望は、社会的視野に立脚した能動的な行動の中に開かれてくると考えられる。国際情勢がより複雑化し、社会の多様化が進む次代においては、学生の

価値観も多様化するものと考えられる。それらに対応するための対策を進めなければならない。

やがて迎えるであろう学生の急増・減少期に対応した教育条件の整備が急務である。二拠点における大学運営には、運営に対する基本的認識の若干の転換も必要であろう。特色ある大学の創成のため、特に私立大学においては二十一世紀に向けていかに社会的要請に答えるかを早急に模索しなければならない。

最後に田辺校地に向けて、いろいろな不安、不満が垣間見られるが、教育・研究の質的向上に焦点をあて励むことによって、一切の不安、不満が解消されるものと確信する。いま我々ひとりひとりに要求されるものは、全同志社人の一致団結が移転成功の成否のかぎを握るとの共通認識ではなからうか。

(大学工学部教授)



# 拡大と縮小

— 田辺校地開学を契機として —

同志社は大きくなる。

女子大学もそのなかで大きくなる。

来年四月には英米語科、日本語日本文学科あわせて定員四百名の短期大学部を発足させる計画で、現在二年目の申請も終え、文部省の審査、認可を待っているところである。

全学年が一挙に田辺に移ることになる音楽学科も、二十五名の定員を百名に増員するための準備を進めている。

さらに二年後の昭和六十三年度には、「日本文化学科」という四年制の新学科を増設することもすでに決定されており、準備や認可が予定どおりに進めば、学生数は昭和六十六年度には、今出川、田辺両キャンパスあわせて、およそ現在の二倍に近い五千人を数えることになるはずである。

学生数が倍になれば、教員、職員の数もそれに応じてふくらむのはいうまでもない。

## 尾崎 寔

もう一つは物理的な拡大、つまり校地、建物のそれである。

校地が現在の約三倍、校舎、管理研究棟をあわせた建物の延床面積は二倍に達する。

これほどの規模の拡大が、このような短期間に行なわれるのは、女子大学はじまって以来のことであるのは勿論だが、世間を見渡してもあまり例のないことではないだろうか。

この大きな変革が目前にせまってくるにつれ、さまざま不安があらためて語られているが、その一つに財政問題がある。「個人が家を建てる場合を考えても、無理なく返済できる借入金の額は年収の二倍まで」、「いや三倍までは」といったやりとりは、それなりに分りやすい。しかし、女子大学の田辺校地利用に要する総費用が概算で百億に達しそうだとうわかったとき、みな一様にショックを受けたが、教員のあいだで「そうですか、やっぱり百万かかりますか」と、うつろな調子でつぶやいたものが一人や二人ではなかった。

これは意識のスコープの問題である。経済が専門というのならともかく、日常的な金錢感覚のなかに、億の単位がすっかり据えられているというような教員がそう大勢いるとも思えないし、その必要もないだろう。

「年収の二倍、三倍」、「百億」を「百万」といった感覚は、理解の枠を越えた事柄について、なんとかありあわせの物差しで測ろうという努力のあらわれと考えれば、いっそ微笑ましい。

微笑ましいといつて済まされないので心のスコープのことである。

これにはいくつか別の話をしなければならぬ。

今年にはいつてアイルランド沖のインド航空、ダラスのデルタ航空、そして日本航空と、大きな航空機事故が続いた。痛ましいこれらの事故に巻き込まれた人たちの悲しみをよそに、冷やかな論評を加えるつもりはないのだが、それぞれの事故の際のわれわれの心の動き、それに対応する報道のあり方などに私は強く注意を引かれるのである。

外国で起こったこれらの事故の報道をみると、何よりもまず日本人乗客の有無が確かめられている。犠牲者のなかに日本人が含まれていなければ、早々に紙面から消えていく。

一方記憶に生々しい日航ジャンボ機墜落事故の場合はどうだったか。連日大々的な報道がつづいたが、五百人を越える乗客名簿のなかに、知人友人の名前がありはしないかという思いで記事に注目した人が多かったのではないだろうか。私も乗務員のなかに、卒業生で日本航空に勤務しているもの名を見つけて一瞬うろたえた。や

がて姓だけでなく名前も発表され、別人とわかり、ほっとしたのを覚えている。

私が今言おうとしているのは、この「ほっとした」気持ちのことである。なぜ教え子なら「うろたえ」、別人であれば「ほっとする」のか。

この疑問をつきつめていくと、人間は、心の動揺をひき起しうる対象を、注意深く選別し、制限して暮らしているという現実にいきあたる。

食べ物の好き嫌いのはげしいわが子が、十分満足しているかどうか、心優しい母親はなお氣遣う。しかし、アフリカで飢えている子供たちの姿を目の前に突きつけられ、それにたいして、わがままなわが子に向けたと同じ心のエネルギーを注ぐことができるか。それをしないからといって、日本の母親たちが冷たい、自己中心的だと非難することはあまり意味がない。人間にとって、消費できる心の容量は、銀行預金の残高同様、個人差はあっても、限られていると知るべきである。

同志社の現状、未来について、これまで誠実に考え、憂えてきた人の数は決して少なくないと私は思っている。しかし、今後、それらの人たちといえども、今出川と田辺にキャンパスが二分され、女子大学だけでも今まで存在しなかった短期大学部や新学科がつけ加えられて急激に膨張していくなかで、同志社の全体にわたって、これまでと同じような心の出費をつづけていけるかどうか。

別の例をあげよう。

『五月二十七日午後七時五十五分頃同志社女子大学前の横断歩

道を渡っていた清掃会社従業員Aさん（七三）がオートバイにはねられ、脳内出血で間もなく死亡した。Aさんは同志社女子大での清掃作業を終え、帰宅中。』

この記事は今年五月二十八日、夕刊の片隅に載っていたものである。おそらく、気づかなかった人も多いだろう。

このおぼあさんが、もし同志社女子大学の専任職員だったらどうだったか。きっと学校中の騒ぎになっていたはずである。学内の清掃が、別組織の会社との契約に委ねられてから久しい。それは時代の趨勢という以上に、学校全体の経営を合理化し、少しでも安い学費で運営していくためにとられた措置であろう。だからここで、そのような経営方式の是非を論ずるつもりは私にはない。

しかし、この事故の際明らかになったように、われわれは、経営分離と同時に、同じ場所を職場としている人間であっても、まったく別世界の住人であるという枠組みを作りあげ、その人たちの運命について、ほとんど心を動かされずに済むという、「心の節約」をも果たしているという一面があることを認めなければならぬと思うのである。システム次第で「勘定」だけでなく「感情」をも節約できるのである。同じ場所で働きながら、組織が異なるだけで、もはや人間としてのつながりをほとんど完全に断ち切ってしまうことが可能になるのだ。ましてや場所が異なり、仕事の種類が違ってもえば、そこで起こる出来事に、われわれの心はほとんど波だつてとがなくなる。性格的に暖かいとか、冷たいということとは何の関係もない。いやむしろ心優しい人のほうが、他人の不幸にも深く傷つき、わがことのようにに痛手を受けてしまうので、どこかにそ

ならないで済むような防波堤を築いてしまうのだといってもいい。悪意などかけられないまま、無自覚に殻のなかに閉じ込もっていった結果生れてくるのが、いわゆる官僚主義、セクシヨナリズム、そしていわれのない差別の実体であろうし、ひいては国家間の争い、摩擦の原因ともなるものであろう。

かつて、ヴェトナム戦争たけなわだったころ、私はアメリカにいて、毎日のように報じられる戦況に、同じような戸惑いを感じた記憶がある。

「わが軍の死者××名、しかし敵側はこれを大きく上回る〇〇名の死者……。」この記事のなかの「しかし」という一語の持つ意味は大きい。敵味方合わせて、どれだけの人命が失われたか、ということは問題ではない。まるで敵側の死者の数によって、戦死した味方の兵士の命が、それだけ償われるとでもいうような錯覚が、当時のアメリカ人のあいだでは広がっていたのではないか。それは太平洋戦争終結にいたる暗い日々、われわれの記憶とも重なってくる。

組織が肥大していった、平凡な人間の意識や心のスコープでカバーしきれなくなってきたとき、細分化が行なわれることの必然性を、私は認めているつもりである。責任の所在を明らかにするためにそれは必要なことであろう。

問題は、この同志社にとって未曾有の変革期を迎えて、われわれの精神は、物理的な拡大とは逆に、スコープを縮小し、今まで以上に心の出費を抑える方向に進むのではないかという見通しにある。

女子大学では短期大学新設にあたって、あえて困難な道を選んだ。つまり、組織上、短期大学は女子大学の一学部という位置づけである。このことは、これまで指摘してきた人間の心の自然な流れには、真向から逆らうものだろう。一個の独立した短期大学として、分離すべきだという意見は、現在にいたるまで消えていない。

たしかに、このことが開設準備を進める際に、どれほど作業を複雑にし、困難なものにしたかは言葉につくせないほどである。勿論これまで築かれてきた伝統のもとに、学内に蓄積されたあらゆる力を動員できたという利点を否定するものではない。そのために四年制、短期大学相互に教員の交流を、組織的、定期的に行なっていくという申し合わせがなされ、現女子大学教員スタッフのなかから六名が短期大学部に移るといふ形を実現することができた。その半面、これに倍する新しい教員の採用について、全学的な委員会や教授会での審議、了承を得る必要があったし、今後の採用、移動など、人事の進めかたに関し、未解決の問題を多く抱えての出発となった。

なぜあえて、より困難な道を選んだか。

そもそも短期大学の創設には、同志社教育の体系のなかに、これまで欠けていたものを補い（残るのは小学校だけになる）社会の要請に応えるという、教育機関としての大目的があった。同時に、今後一層深まるものと予想される、私学経営の危機回避の一助とする意図があったことは、田辺校地利用を検討した委員会答申のなかでも率直に述べられている。

仮りにもそのような意図を含む短期大学部の創設、運営を、その部分の運命について心の出費を抑えることのできる別組織に委ねられるものかどうか。それを悪しき植民地主義とは呼ばないか。どれほどそのほうが容易であるとわかっていても、良心教育を校是とする同志社に許されるものかどうか。

結論をいえば、運命を共にする一体のものとして短期大学部を創設し、育成していくという基本方針について、学内の圧倒的多数の賛同をえた。田辺校地利用をめぐる教授会の対応が、あらゆる問題に関して賛否相半ばしていた当時としては、まさに異例のことであった。

現代人のなかに、他人とわが身をできるだけ切り離しておこうという傾向は深まりつつある。「関係ない」という流行語ほど、日本語のなかで、寒々としたニュアンスを含むものはないと私は思っているが、情報の洪水に日々さらされているわれわれにとって、それはわが身を守るための本能的な姿勢なのかもしれない。

他人の悲惨な運命に、わがことのように心を痛めるといふのは、人間には限界があると認めながら、私は長々と駄言を連ねてきた。しかし、もしこの際、家族、友人、同僚、属する組織やグループ、祖国といったものへの愛情という、これまで自ら規定してきた心のスコープを再点検し、新たな広がりを獲得することができれば、われわれは、外に起こる不運に涙するだけではない。これまで無縁のものであった外側の幸運を、わが身におとすれた幸運と同様に喜ぶことができるはずである。

この、同志社はじまって以来の拡大期に、むしろ縮小に向かおうとする心の無自覚な流れをせきとめ、さらなる広がりを目指そうとすれば、覚めた知性とゆるがぬ信仰、そのいずれもが必要である、どちらが欠けても、同志社のいきつくところに希望はない、良心教育を目指し、国際主義を高らかにうたいあげる同志社にあって、心が縮んでいくことは食いとめなければならぬと、繰り返して強調されたのは、亡くなられた前総長上野直藏先生であった。先生が、同志社のために日夜心を砕いてこられたことを知らぬものはない。しかし、その苦悩の一方、三年前東京で行なわれた新島講座、それにつづく同志社イヴの会場で、超満員の校友とカレッジ・ソングを歌ったときの喜びを語りながら、先生が、声をふるわせ、涙を流された姿を、私は忘れることがないだろう。

(女子大学教授)

× × × ×

× × × ×

同志社談叢 第四号

論 文

アーモスト館五十年の歩み (仮題) .....

悲劇の日本銀行総裁・深井英五 .....

— 金融政策の激動期を生きた同志社人 — .....

同志社の近代建築 (下) .....

— 遺構と資料 — .....

資 料

同志社常議員会録事 .....

— 自明治二十三年四月 至明治三十一年七月 .....

組合教会臨時総会決議・議事録時抄・懇談会記事 .....

(明治二十一年十一月二十三〜二十八日、於大阪教会) .....

新島襄に関する文献ノート (其の三) .....

(頒価 一、〇〇〇円)

同志社談叢 第五号

論 文

原六郎と同志社 .....

新島襄と柏木義田 (その一) .....

— 柏木資料からみる思想的関連 — .....

同志社第十代総長 湯浅八郎 .....

同志社女子部管理方改革について .....

資 料

ハリス理化学校関係資料 .....

同志社理事會常務委員会記録 .....

— 自・明治四十四年九月六日 至・大正七年九月九日 — .....

新島襄に関する文献ノート・その四 — 著者・筆者別 — .....

同志社に関する文献目録 .....

(頒価 一、〇〇〇円)

発行・同志社史資料室

取扱い・同志社収益事業課  
(電〇七五—二五一—三〇三七〜八)

仲村 研  
武 邦保  
和田洋一  
宮沢正典

北垣宗治  
杉井雅彦

前 久夫  
山形政昭